目

次

はじめに　隈 研吾 —— 9

第一章　なぜ東京は世界中心都市のチャンスを逃したか —— 19

「超高層の自社ビル」時代の終焉
「イチロー的」な建築とは？
一発屋かサラリーマンか、という悲惨な二極化
スタバから棺桶まで——建築とコラボレーション
新しい中心都市には新しいクリエイター階級が集まる
東京が素通りされた三つの理由
都市を破壊した「マンション文化」と「相続税」
「小さな東京」に未来がある

第二章　シェア矢来町——私有というワナ —— 57

現代の駒場寮みたいなところを作りたい

シェアハウスの原点は、八〇年代の住宅革命運動
三十年前のプロジェクトの挫折、そして……
私有というワナにはまってしまった
「川沿いの準工業地域」の面白さを発見する
シェアハウスを都心の高齢者施設に

第三章　神楽坂「TRAILER」――流動する建築

長持ちすることが善である、という錯覚
ビルの谷間に出現したトレイラーハウスのビストロ
さまよえる建築の原体験は、大学院時代のアフリカ調査
丹下健三への憧れと失望
恩師・原広司から教わったこと
アフリカの集落はインターネット的な分散型だった
人生の目標は、テントの気楽さを作ること

第四章 吉祥寺「てっちゃん」——木造バラックの魅惑——113

「歌舞伎座」「東京中央郵便局」「てっちゃん」は等価である
椅子に、壁に、天井にからみつく「モジャモジャ」
東京における「木造」の価値を再確認した
被災地に作った、木造長屋の商店街
安っぽさをハードでどう美しくするか、それが建築家の力量だ
コスト意識がない建築家は社会から排除される

第五章 池袋——「ちょっとダサい」が最先端——147

渋谷の「垂直都市化」は世界標準をはるかに超える
タカラヅカが池袋にやって来た！
タワー型（垂直）の渋谷、スクエア型（水平）の池袋
木賃アパートとタワマンの〝マリアージュ〟
ピンチはチャンス——「消滅可能性」ショックからの反転攻勢

終章

ずっと東京が好きだった

「南池袋公園」のリノベーション
都電荒川線が池袋のアイデンティティを形成している
団地には、マンションが失ったものがある
団地に息づく「ビレッジ」のＤＮＡ
都市再生には「文化」が必要だ

東京から放逐された九〇年代
ゼロ年代の都市再開発はテーマパークの手法を引きずっていた
景観復活のきっかけは、東京駅舎の復原と丸の内の再開発
震災以降、ＪＲ東日本のスタンスが変わった
「地元」を持っている会社は強い
ユーミンには八王子と東北があったから、六本木を発見できた
自分がクライアントになっちゃえばいい

コルビュジエの建築みたいなケーキ
超高層タワーがないまちに新しいワーク＝ライフが生まれる
コロナ禍は、東京が大人になる節目
おわりに　清野由美 ―― 248
参考文献 ―― 253

文中写真、クレジットのないものは清野由美撮影

はじめに

隈　研吾

うまくいっている時、人はなかなか学ばないものである。人は惰性に流されやすい怠惰な生き物で、自分を変えるのは苦手である。本当にひどい目にあった時、大きな犠牲を払って、人ははじめて変わることができる。僕自身を振り返ってみても、ひどい目にあって、人生がいったん弾(はじ)けて、どん底になった時に、はじめて変わることができた。

都市も同じだと思う。うまくいっている時、うまくいっていると思い込んでいる時、都市はなかなか変わることができない。その意味では、都市の方が人間よりもっと変わりにくいものかもしれない。都市は図体が大きいし、ちょっと変えるだけで、巨額な金がかかる。法律や所有関係などでも、がちがちに縛られているから、都市が変わるというのは想像以上に大変なことである。

しかし長い歴史上には、都市も変わらざるをえないことが何回かあった。いつかというと、人間が変わる時と同じで、都市がひどい目にあった時である。

たとえばシカゴでは一八七一年の大火で、市街地にある煉瓦（れんが）と木の建築の大半が燃えてしまった。そのような大変な犠牲を払った後、コンクリートと鉄の街を作ろうということになり、そこから「シカゴ派」という鉄骨造りを中心とした新しい建築のムーブメントが起こって、二〇世紀アメリカの都市の原型ができあがった。

「ひどい目」の中でも、とりわけ都市に与えた影響が大きかったのが、一四世紀のペストの流行である。ヨーロッパでは、ペストが中世の時代に終止符を打ち、その後にルネサンスが到来した。

ルネサンスはよく「文化の復興」と訳されるが、その作用は都市においても同様であった。中世の都市は一言でいえばゴチャゴチャとしていた。ストリートは狭く、不衛生で、ゆえにペストの温床となった。ルネサンスの都市計画は、整然としたストリートを指向し——実際にはほとんど実現しなかったが——都市の単位となる建築も、整然としたものが目指された。ペストから人々を救えなかったキリスト教会に対する信頼低下も、ここで

一役買った。神に頼ってばかりいないで、自分の頭で考えよう、ということになり、数学、科学が重要視され、数学によって形態を整理し、寸法を計算されたルネサンスの建築と都市が歴史に登場したわけである。

この、ペストからルネサンスへという流れの行き着いた果てが、二〇世紀であったと僕は考える。整然として閉じたハコを、どんどん建てて、どんどん大きくするという流れだ。超高層が乱立する現代の巨大都市をイメージすれば、流れの最終形を僕らは容易に想像できるだろう。

ここで最も重視された基準は何かというと「効率性」であった。閉じたハコ、すなわち人工的な環境に人を閉じ込めること、閉じ込められることが「効率的」であるとされ、それが「幸福」であるとも定義された。大都市の工場やオフィスビルはハコの典型であり、中でも超高層ビルは、それらのチャンピオンだった。人々は、電車やバスというハコに詰め込まれて、自然を破壊して建てた郊外のハコに帰る。その行動様式が、ポストペスト時代の生活のデフォルトになった。僕はこれを「オオバコモデル」と呼ぶ。実際のところ、「オオバコモデル」は、今や少しも効率的ではなく、ストレスの原因でしかない。

オオバコモデルに至るまでの人類史には、先述したシカゴ大火以前から、リスボン大地震（一七五五年）による都市デザインの転換など、歴史的な事件が起こっていたが、振り返れば、それらはすべてペスト禍から超高層ビルへという大きな流れの中での、小さなエピソードに見えてくる。

そして二〇二〇年の新型コロナウイルスの世界的な感染拡大である。ポストペスト以来の流れによって、世界中を埋め尽くした巨大な都市の人工空間が、いかに脆（もろ）く、いかに生物としての人間の生理に反した不自然なものであるか。ここに来て、コロナウイルスが、その問いを世界につきつけたように僕は感じる。コロナウイルスが来なければ、僕たちはポストペストの慣性のまま、都市に閉じ込められ、効率性の神話を信じ続けていたかもしれない。方向転換もできぬまま、不自由になってしまった自分の姿に気が付くことなく、さらにオオバコを積み重ね続けていたかもしれない。

とりわけ日本は、このオオバコシステムの優等生であった。第二次世界大戦後の日本は、オオバコを作ることで、欧米にキャッチアップしようと走り続けた。その熱情を支えていたのは、それ以前の日本の都市が、オオバコの対極だったからである。

たとえば江戸のまちでは、通りは狭く、ヒューマンスケールで、木造の家は風通しがよく、公私の境はあいまいだった。これはオオバコとは、実に対照的な姿である。江戸のまちは、そのヒューマンスケールを保ちながら、他のいかなる国よりも衛生的であり、環境資源のリサイクルを含めて、効率性の高い都市システムを構築していた。だからこそ、世界のオオバコ化の流れに巻き込まれることなく、日本独自のシステムとして、第二次大戦時までサバイバルできていたのである。

しかし敗戦によって、日本は江戸システムとは訣別（けつべつ）し、オオバコシステムに追いつこうと、政治、経済が一丸となって疾走を開始した。その中心となった担い手こそが、建設産業であった。建設産業は政治を支え、政治は逆に建設産業を支えることで、日本は戦後に効率性至上主義へとなだれを打つ。

オオバコシステムは、オフィス空間のみならず、都市のすべての空間のモデルとなった。教育も同じく、生徒を均質なオオバコに詰め込んで、「平等」に授業を供し、それとは矛盾する競争に駆り立てることが効率的とされた。そこで育った子どもたちは、そのまま企業というオオバコに詰め込まれ、同じように激しく競争させられて、ある年齢に達したり、

「効率」が落ちてきたりすると、オオバコから放り出された。そのシステムが人間に強いる大きなストレスに対しても、効率性の名のもとに、目がつぶられ続けた。

日本国民による「疾走」のユニークな点は、このオオバコシステムが曲がり角に来ても、依然としてみんなが走り続けたことである。二一世紀は、経済の低成長、その前提となる高齢化社会の到来で、オオバコの必要性はそもそも薄れていた。実際、ITテクノロジーの発達によって、オオバコに閉じ込められなくとも、僕たちはすでに十分効率的に、しかも、はるかに気楽で自由に仕事をすることが可能となっている。にもかかわらず、日本人は風通しの悪いオオバコにこだわり続けた。その背景には、建設産業の「サムライ化」があると僕はにらんでいる。

江戸時代以前の戦国時代は、戦後の日本が建設産業を必要としていたように、「武士（おサムライさん）」という武装集団を社会が必要としていた。それら武士の集団は、江戸時代に世の中が静かになった後には、もはや必要がなくなったが、それでも徳川政府は彼らを社会の上位の階層として温存し、奉った。温情社会ならではの、そして、慣性力がやたらに強い日本ならではの、やさしく生温（なまぬる）い決断である。

それと同じことが、昭和から平成にかけて起こった。

都市にオオバコを早急に整備しなければならなかった昭和の時代には、建設産業が国を支え、社会全体が建設産業を必要とした。戦国時代にマッチョな武士集団が必要とされたように、コンクリートと鉄で、大きくて密閉されたものを作るだけのマッチョ集団を、社会システムが必要としたのである。

しかし、現在はどうであろうか。平成以降、昭和とはうって変わった低成長、少子化と高齢化が、社会の大きな問題となっている。そんな時代にマッチョな建設産業は、江戸期の武士集団と同じく、もはや無用の長物と化した。それでも幕府＝政府は、建設産業の集団主義、統制主義が、選挙の強力な集票装置になりえることを知っているから、建設産業を可能な限り保護し、優遇し続けた。

これはきわめて日本的な現象でもあった。オオバコ化は近代における世界的な歴史現象ではあったが、金融やＩＴのような「軽い」産業の方が儲かると気付いた諸国は、いち早くそこから卒業している。しかし、日本は前世紀的な建設産業を担っていた社会集団＝武士を温存して、オオバコ化からの卒業が遅れた。だから日本の都市はいまだ、固く、重く、

閉じたままなのである。

コロナの後の都市のテーマは「衛生」ではなく「自由」である。人がハコに閉じ込められて、同じ時間に通勤、通学させられるのではなく、好きな時に、好きな場所で仕事をし、眠り、移動をする。現代のテクノロジーは、すでにその自由を僕らに与えている。しかし、都市が、そして建築が、その邪魔をしている。

僕も含めて建築設計者もまた、長い間、武士であった。時代から取り残され、必要とされなくなった社会集団は、新しい現実を理解できないままに、自分たちの美学を日本刀のように磨き上げ、内側の倫理観を人に押し付けて、ふんぞり返る。倫理というのは、しばしばそのような目的で使われる。人のお金で、建築を作らせてもらっているくせに、現実の社会から仕事をいただいているくせに、その現実を見下し、自分たちの美学、倫理の方が上等であると勘違いした。

そのことに気付くようになってから、僕は自分で小さな商売を始めることにした。若い仲間とシェアハウスを作り、その屋上に野菜を植えた。木のトレーラーハウスをデザインし、そのトレーラーハウスで実際に移動式の飲食店を経営してみた。小さな工場や田舎の

職人と直接つながって、一緒に新しい材料に挑戦し、セルフメイド建築の可能性を追究した。廃品の収集、再生を商売とする人たちと知り合い、廃品を主役にした建築も作り始めた。オオバコの外側にある風通しのいい場所、そこで生きる自由な人たちと仕事をし、暮らすことで、それがいかに自由であるかを知った。

コロナ後の未知の時代を、どう生きるか、その新しい地面の上にどのような都市を作るべきか。自分自身の小さな体験が、何かを教えてくれる。そのための具体的なヒントを、清野由美さんともう一度考え、探した結果が、この本になった。ペストから約七百年。僕たちは歴史の大きな折り返し点に立っている。